保健体育部会

県研究主題
心と体を一体としてとらえ，生徒一人ひとりが生涯にわたって自らの健康・体力つくりを考えて行動する資質や能力の基礎を培う学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　清水　昭幸（横浜地区）
神戸　希　（横浜地区）

＜研究主題＞
指導と評価の一体化を図る教材研究
～「しっかり教え、しっかり引き出す指導」に向けた教材研究と授業実践～

１　提案内容

『中学校第１学年　器械運動　跳び箱運動』

課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力、その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うために「しっかり教え、しっかり引き出す指導」を充実させることが大切になる。

「単元づくり」に、より一層積極的に取り組む必要性、「指導と評価の一体化」が図れるよう授業前の教材研究の必要性の研究を進めていく。

（１）教材研究

目標　生徒の実態　単元の特性
⇩　・身につけさせたい力を明確にする
単元目標の設定　単元構想
⇩　・教材の設定、場の設定、指導の手立て、運動の特性、言語活動の充実
評価規準　指導と評価の計画
⇩　・毎時間のねらい、指導内容、評価すべき点が明確になる
指導と評価の一体化

（２）授業実践

台上前転を滑らかに行うために、①マットで前転ができる、②マットで跳び前転ができる、③補助ありで台上前転ができる、④台上前転ができる、⑤膝を伸ばした台上前転ができる、⑥着手まで空間のある台上前転ができると、①～⑥の技能の段階を考慮して授業に取り組ませた。

習熟度や技能面の個人差を考えて、マット、１段から６段の跳び箱を準備し、課題に合わせて活動できるように場の工夫を行うことで、その場ごとで相互評価やアドバイス、補助を行うことができ、苦手意識を持った生徒も積極的に練習に取り組めるようになった。

低い段数でもきれいに安定した跳び方ができることが素晴らしいことであると理解させて、高い段数で跳ぶだけが高技能なのではなく、技の滑らかさの向上に目を向けさせることで、より細かな課題に対応した練習に取り組み、技能の向上や関心の高まりにつなげることができた。

２　質疑応答

問　跳び箱運動でのグループ分けについてどのように行ったのか。

答　習熟度を考慮した場を複数準備し、生徒に自分の能力に応じた練習場所を選択させ、同じ場所で練習する生徒を一つのグループとした。跳び箱を跳んだあとに、次に跳ぶ仲間を観察し、アドバイスをする方法を行った。

問　能力の高い生徒に対してはどこまでの技能に取り組ませたか。

答　難度の高い技に挑戦させるのではなく、技の完成度に着目させるようにした。より美しく技能を行うために、膝を伸ばす、腰を高く上げる、着手までに空間をつくるなど、細かいポイントを意識させ運動を行った。

問　評価規準について提案の計画では、観点が一部のようであるがどうか。

答　今回は台上前転を行ったが、３年間を見通した評価規準を作成しており、１年生で全ての評価項目を評価しているわけではない。

問　授業を実践してみての生徒の様子はどうであったか。

答　小学生の時に台上前転を行ったことはあるが、新しい練習方法、細かいポイント、新しい視点を与えることで、意欲的に取り組む姿が見られた。また、演技に対し演技を見ていたグループの生徒に拍手をさせ、その拍手の回数で評価をさせた。高い段数を跳べたわけではないが、３回の拍手（最高の評価）をもらえたことで達成感を得ることができた生徒がいた。

提案２　　提案者　角田祐生（湘南三浦地区）

＜研究主題＞
教え合いの活動を生かした授業づくり
～課題の明確化・視聴覚機器の活用～

１　提案内容
「第２学年　陸上競技　～長距離走～」
「課題を持って自ら運動を行う」ためには、客観的に今の自分状態を知ることが重要である。その手段として、視覚的に訴えることのできる視聴覚機器を利用してフォーム分析の研究を行った。

（１）言語の動作化　（教師の説明、実技書からの知識）

（２）動作の言語化　（学習カードや教え合い）

（３）イメージの一致　（ビデオで自分の姿を撮ることで、自分の姿がどうなっているのかわかる）
①ビデオを使ってのフォーム分析
自分のフォーム、仲間のフォームを見ることでお互いに意見交換ができた。
②教え合いの活発化
視聴覚機器を使用し、興味を引き付けたことで、次の単元のマット運動でもビデオを使用しお互いにアドバイスを送ることができた

２　協議内容（質疑を含む）
（１）質疑
問　視聴覚機器はどういったものを、どれだけ用意しているのか。また、誰が撮っているのか。
答　ビデオ２台、パワーポイントを使用、班に１枚ＳＤカードを用意した。また、最近はタブレットＰＣなどの活用も準備に時間がかからず良いと思う。

問　フォーム分析をして、その後の生徒の反応、タイムへの反映はあったのか。
答　フォームが良いからといって、必ずしもタイムが伸びるわけではないが、長い距離を走るうえでは疲れにくく楽に走ることができる。また、外で走りその場ですぐに見ることはできないが、屋内で見て次にまた屋外で走る時にアドバイスを送る姿が見られた。

（２）協議（言語活動の充実）
保健体育では、以前から学習カードなどを取り入れてきたので、今からやろうというものではない。しかし、学習カードを記入させる時間の確保や記入のさせかたを、事前に指導していないと何のために記入するのかわからなくなってしまう。
また、知識を導入の段階で身につけておかないと、言語活動は充実しない。毎時間キーワードを設定するなど工夫することで、考えやすくなる。
記入時間を確保することも大事だが、言語活動は書くことだけではなく、アイコンタクトやボディランゲイジも言語活動に入るのではないか。
教師が良い授業をしたら、良い言語活動は自ずと出てくるので、まずは授業を良くすることが大切である。
生徒に勝手に考えさせるのではなく、先生も中に入って考えていく姿勢が大切である。また、学習カードに書かせたら、コメントを入れていくことも大切である。

３　指導助言
今回の学習指導要領の改訂の大きなポイントの一つとして「言語活動の充実」が挙げられている。しかし、保健体育はお互いに協力なしには行えない教科であり、自然と言語活動が行われているはずである。特に体育分野では、運動量を確保した上での言語活動の充実が大前提にある。
今回の発表にあった、「言語の動作化」「動作の言語化」「イメージの一致」この３つが行き来していないといけない。また興味・関心を引き出すには、動作を見合うことが大切になってくる。

体験のないところに、どんなに優しい言葉で訴えても理解しにくいことが多い。しかし、そこに視覚で訴えることができると、理解しやすくその後の影響は大きいものとなる。そして、その時の資料を子どもに出す時に、「出すタイミング」が大切になってくる。アドバイスが習慣化することが、仲間つくりの形成にとても大切になってくる。

・学習カードの充実　簡潔で短い表現で質を高める。
　コミュニケーションマインド・・間違えても笑わない。
・学びの質の充実　学ぶ意欲を大切にする。教えることはしっかりと教えることが大切。何も教えないで子どもの力はつかない。
・言語化と非言語化　人は言葉よりも目で見て情報を得ている。
　アイコンタクトやボディランゲイジで構わない。

４　まとめ

教育課程実施上の課題と指導上の留意事項

（１）単元計画立案上の留意事項

・「体つくり運動」「体育理論」の配当時間数がそれぞれ示されているのは、実時数である。すなわち実際に授業を行う時数が示されている。
・体育理論を実施する場所は、体育施設は想定していない。教室等で行うということである。

（２）指導上の留意事項

・「思考・判断」の指導内容で「ルールを工夫する」というのは、高いレベルなので、いくつかある中から「選択」するレベルで良い。
・言語活動の充実の考え方
　「態度」として、賞賛を送るとか、よい演技を認め合うといったコミュニケーションを図る学習活動として位置づけることが考えられる。
　「思考・判断」として、よい動きを見付けるとか違いを比較するとか、技術的な課題を明確にするといった知識を活用する学習活動としての位置づけが考えられる。